

北海道のほぼ真ん中、新得町で開かれた映画祭に魅せられた女性が、同所の人々の生活を記録したドキュメンタリー映画「空想の森」。映し出されたのは、自然と共生する人々の力強く生きる姿だった。田代陽子監督は「自分の撮りたいもの、それが大地と人々の日々だった」と振り返る。

きっかけは平成8年の「SHINTOKU空想の森映画祭」。当時帯広にいて「遊びのつもり」で出かけた田代は、ドキュメンタリーの面白さに引き込まれた。「出てくる人たちが

魅力的。日常をみているだけで背景が沸き上がってきた」映画祭にかかわる人々にも引



田代陽子監督「空想の森」

大自然とともに生きる人々を追ったドキュメンタリー映画「空想の森」



「ふだんの生活が十分魅力的だった」

かれ、その後は同地に住む藤本幸久監督と一緒に仕事をしたり、映画祭のスタッフを務めることに。そして、平成14年から自らも初めてというドキュメンタリー映画の製作に乗り出した。「身の回りのものを撮ろう」。地域の人々の魅力や自然の厳しさは、それだけで物語になると確信したという。

社会から離れた人、障害のある人、将来を悩む家族、助け合い農作業する住民たち……。「彼らがすてきたと思うシーンにカメラを向けた。一緒にいると、そんな場面はいっぱいあった。毎日仕事をして、おいしいごはんを食べる。喜びや不安、怒りも含め、ふだんの生活が十分魅力的だった」

資金やスタッフが集まらないなか、田代は体調を崩しながらも撮影を続け、ついに今春、7年目にして完成。そこに記録されたのは、まさに「空想の森」に生きる人々だった。「映画は人と人を結ぶ。私も映画を通じて多くの出会いを経験した。みなさんも映画から出会いを感じてほしい」と田代は語った。

大阪・第七藝術劇場で公開中。
(福本剛)